

2024年度 ベトナム研修 報告書

医療科学部 放射線技術学科 3回生 氏名 新林舜涼

〈 研修概要 〉

2025年2月25日から3月6日の10日間、ベトナム研修に参加しました。本研修では、チョーライ病院、フエ医科大学附属病院での病院研修およびフエ医科薬科大学の学生と国際交流プログラムを行いました。研修内容としては、チョーライ病院では、一般撮影、CT検査、MRI検査に加え、核医学検査および放射線治療の見学をし、隣接する健康診断病棟も見学しました。フエ医科大学附属病院では、一般撮影、CT検査、MRI検査の実習に加え、超音波検査を見学しました。

〈 研修参加の目的 〉

私は、挑戦と自己成長を重視し、様々な経験を通じて自分にとって必要なスキルや知識を得ることを目標にしてきました。医療現場では同じ検査でも、患者さんの状態に応じて臨機応変に手技を調整し必要な結果を得るための最適な方法を考え実践する柔軟な思考力や、多職種のスタッフと正確な情報伝達に必要な信頼関係に基づいたチームワークが欠かせないと考えています。

本研修では、新しい文化や環境に身を置くことで、異なる価値観や視点に触れ、自身の偏見や固定観念に気づき、それらを受け入れたり見直したりすることで柔軟な思考が身につき、初めての環境で多くの人とコミュニケーションを取ることで、意思疎通の回り方や良好な関係性を築くスキルも学べると考えました。さらに、英語を用いる環境に身を置くことは、国際的な論文や学会で共有される情報にアクセスするのに必要な英語力を高め専門性の向上につながると考えていました。

本研修への参加は、挑戦や成長を重視した大学生活の延長線上にあり、目標達成に向けた重要なステップだと確信し参加を決意しました。

〈 研修で学んだこと 〉

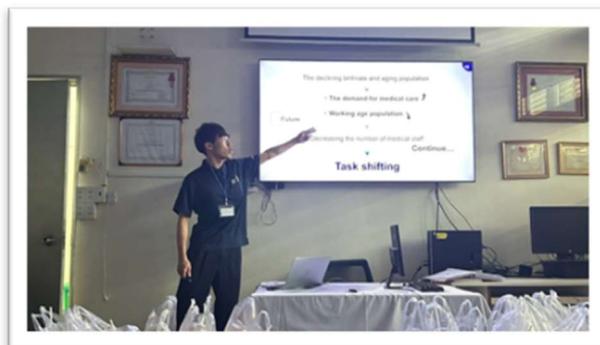
チョーライ病院での学び

ホーチミン市内にある国立チョーライ病院で研修を受けました。チョーライ病院は、ベトナム最大級の総合病院であり、多くの患者が受診する医療機関です。病院内は常に患者やその家族で溢れ移動するのも困難なほど



▲フエ医科薬科大学での集合写真

で、椅子に座れず立ったまま待たされる方が多くおられました。この光景を目の当たりにし、日本の病院との大きな違いを実感しました。また、検査の環境も日本と大きく異なっていました。日本では、検査室内には基本的に検査を受ける患者1人しか入れないが、ベトナムでは、検査室内を患者以外の人が行き来することが当たり前でした。また、患者の介助は診療放射線技師だけでなく、家族や次の検査を受ける患者さんも手伝っていました。また、被ばくに対する考え方も日本とは大きく異なっていました。日本では線量計を常に着用し、被ばく管理が厳重に行われています。しかし、チョーライ病院では、診療放射線技師は線量計を着用せず、患者家族も防護プロテクターなしで介助していました。さらに一般撮影時、照射野を絞らず、撮影部位以外にも照射していました。一方で、ベトナムの診療放射線技師の業務処理能力と作業効率の高さには驚きました。1つの検査にかかる時間が短く、検査と並行して別の患者の静脈路確保や検査説明もあるにも関わらず、検査のトラブルは一度もありませんでした。装置が故障した際は迅速に対応し、業務の滞りを最小限に抑えていました。このような迅速な対応は、技師の高い業務処理能力に加え、円滑な情報伝達やチームワークによる結果だと感じました。実際、日本での研修以上に、診療放射線技師同士や医師、看護師とコミュニケーションを取っている場面が多く見られました。ホーチミンでの研修を通じて、放射線に対する考え方や安全基準は国によって大きく異なることを実感し、一つの価値観にとらわれることの危険性を強く感じました。日本の医療基準や考え方が絶対ではなく、それぞれの国や地域にはその環境や状況に応じた在り方があると感じました。異なる文化や環境に触れることで、物事を1つの側面からではなく、様々な立場や観点から考えることの重要性を改めて認識し、今後もこうした経験を積み重ね、柔軟な思考を身につけていきたいと考えています。



▲プレゼンテーション



▲チョーライ病院見学の様子

フエ医科大学附属病院

フエ医科大学附属病院では、撮影業務を行う機会が何度もあり、業務経験から多くの学びを得ることができました。なかでも、患者さんとのコミュニケーションにおいて、非常に多くの学びがありました。当初、ベトナム語と英語を用いて撮影に関して説明していましたが、思うように伝わらない場面が多くありました。現地で指導いただいた先生方の様子を観察すると、言葉だけでなく、ジェスチャーを積極的に用いることで患者に指示を伝えることがわかりました。ジェスチャーを積極的に用いることでは、言語だけよりも、はるかに伝わりやすくなりました。言葉だけでなく、身振り手振りを加えて誘導することが非常に効果的であることを学びました。



▲臨床実習の様子

ベトナムでの国際交流

チョーライ病院やフエ医科大学附属病院の放射線技師、フエ医科大学の学生との多くの交流で、挑戦から多くの気づきが得られました。「英語が話せない」という理由で、英語を使う場面を避けていましたが、話してみると相手に伝わる事が多く、想像以上にコミュニケーションを取ることができました。研修序盤は、日本語の文章は思いついても英語に変換することができず、会話中に詰まることが度々ありました。しかし、研修が進むにつれ、英語への変換を早でき会話がスムーズにできるようになり、自身の英語能力の向上を感じました。フエ医科大学の学生たちとは研修以外の時間にも多くの交流を持ち、互いの趣味などを話し合うことで、ベトナムの学生たちとより深い関係を築くことができました。英語への苦手意識は薄れ、自信を持つことができるようになりました。また、「正しい文法に固執しないこと」、「聞き返すことは失礼ではなく大切なこと」と気づきました。これらは、挑戦したからこそ得られたものです。苦手意識から避けるのではなく、苦手だからこそ積極的に挑戦することの重要性を学びました。放射線診療に関する研究や技術は日々進歩し、英語で論文や国際学会などで発信されています。グローバルに情報や新たな技術を得るためには英語が不可欠であり、今回の経験を活かして、英語学習をやり続ける決意を新たにしました。



▲フエ医科大学の学生との交流

〈まとめ〉

ベトナム研修を通じて、診療放射線技師だけでなく、人としても大きく成長することができました。これまで、「患者の安全を最優先にする」ことに意識が偏っていました。ベトナムでは効率性を重視したアプローチが求められる場面が多く、複数の視点を持って対応することの重要性に気づかされました。検査手技の目的を考える際、患者被ばく低減のみに意識が向いており他の視点に目を向けることができていませんでした。しかし実際の現場を経験する中で、被ばく低減だけでなく検査効率の向上などの別の目的があることに気づきました。これらの経験を通して、一つの考え方に固執せず、多角的に物事を捉える柔軟な思考が身についたと感じています。ベトナムの検査方法や設備、考え方に触れることで、日本とは異なる医療の在り方を学び、専門性を広げる重要性を改めて感じました。研修序盤は話が相手にうまく伝わりませんが、伝え方を工夫する中で徐々に改善し、効果的なコミュニケーションを学びました。英語での会話に対する不安も軽減され、自信を持てるようになりました。これらの経験を糧に、国際的な視点を持ちながらより質の高い医療の提供を目指して、一層の研鑽に励んでいきます。



▲パーティーの様子

〈謝辞〉

多忙の中、病院研修を受け入れてくださり、貴重な機会を与えてくださったチョーライ病院およびフエ医科大学附属病院の放射線技師の方々、また、実習中にも関わらずフエでのさまざまな体験を計画してくださったフエ医科大学の学生の皆様に、心より感謝申し上げます。加えて、ご引率いただいた玉木長良学長、霜村康平講師、石田翔太助教、本谷崇之助教に、深く御礼申し上げます。